

被爆 75 周年 原水禁世界大会福島大会 開催地代表挨拶

2020 年 8 月 12 日

福島県平和フォーラム代表 角田 政志

皆さんこんにちは。福島県平和フォーラム代表の角田です。

広島・長崎は、被爆 75 周年を迎え、福島は、原発事故から間もなく 10 年となります。そして、チェルノブイリ原発事故からも 35 年という、節目の原水禁世界大会を迎えました。

今年は、多くの方々に福島に来ていただき、現状を見ていただいたり、福島課題と合わせた脱原発社会を目指す議論をすることはできません。しかし、このように、福島の現状と課題を発信させていただく機会を得ることができました。関係者の皆様に御礼申し上げます。

昨年の福島大会では、東京電力が、「福島第二原発全 4 基の廃炉を正式に決定する方針を固めた」との報道がなされことを報告しました。その後、東電は、正式に廃炉を決定しました。

私たちが、原発事故以降、「原発のない福島」を求めて全国の仲間と連帯し運動を続けてきた大きな成果と言えます。しかし、廃炉が決まっても、困難な課題がたくさんあります。事故を起こした原子炉のデブリは取り出せるのか？取り出せたとして、どう処分するのか？使用済み核燃料はどうするのか？高濃度に汚染された原子炉容器などはどう処分するのか？廃炉を決めても、行き場のない核のゴミ問題は残ります。

これは福島だけの問題ではありません。全国原発も同じです。一日も早く全ての原発を止め、原発の建設をやめ、再生可能なエネルギーを主とした未来を創っていかねばなりません。

福島では「第一原発と第二原発の安全かつ着実な廃炉の実現」に向けた運動が始まっています。

今、国と東電は、たまり続けている「ALPS処理水」の海洋放出を早期に行う考えを示しています。「ALPS処理水」には、高濃度のトリチウムが大量に含まれています。

トリチウム汚染水の海洋放出によって最も打撃を受けるのが漁業関係者です。福島県の漁業は、これまで試験操業を続け、やっと本格操業への道が開ける段階になってきました。東電は、「バイパス・サブドレンからの地下水を海洋放出することの了解」を福島県漁連に求めたとき、「ALPS処理水は海に流さない」と約束をしています。国と東電は、その約束をも破ろうとしています。県漁連はもちろん、全国の漁業組合も断固反対しています。

今日は、新地町の漁師さんの思いを聞いていただきたいと思います。

反対を明確にしているのは、漁業関係者だけではありません。原発事故以降、放射能に汚染された台地で、放射能の低減に取り組み、安全でおいしい農作物を作り、信頼の回復に努力してきた農業関係者も反対しています。山の文化を守ってきた林業関係者は、山林の除染すら行われないうちで、また、放射能を放出することは絶対認められないと言っています。

事故を起こした当事者である国と東電が、「ALPU 処理水」の保管が限界だと、自分たちの都合を優先して、原発事故からの復興の努力と、今後の生業を訴え、反対していることに目をつむり、再び、故意に、放射能を放出することは絶対に認められません。

国も東電も、「福島復興と廃炉の両立は大原則」と言っています。しかし、今やろうとしていることは、「人々の生活の犠牲の上に廃炉を進める」ということです。被災者をはじめ多くの人たちの意見を無視した「トリチウム汚染水」の放出を、させてはなりません。

私たちは、「本当に原発のない福島」を取り戻すために、これからも声を上げ続けていきます。

フクシマの悲劇を二度と繰り返さないためにも、全国の原発再稼働反対の運動を進め、「原発も核も戦争もない」平和な社会の実現を目指す決意を表明し、福島大会開催地を代表してのあいさつとさせていただきます。

共にがんばりましょう。